



優勝した宮下優子さん (三机中一年生)

宮下さん県中学総体で優勝

女子百米 13' 30" の好タイム

七月二十四日、松山で行われた県中学校総体一年女子百米に出場した宮下優子さん(三机中一年)は、十三秒三の好タイムで堂々の優勝を果たした。
なお、宮下さんは、八月四日高松で行われる四国大会に出場の予定であるが、是非頑張って四国一をめざしてほしい。

宮下さんの喜びの声

優勝の自信は、なかったがリラックして走ったのがよかったと思う。四国大会では、予選通過を目標に頑張りたい。

町が行革に取り組む

瀬戸町行政改革推進委員会設置

国の地方行政改革大綱に基づき本町でも「瀬戸町行政改革推進委員会」を設置して、自治体行政の取り組みが、本格的に始動しました。
行政改革推進委員会は、民間有識者ら7名から構成されていて、町の行政の方針や内容などについて意見を聞くことになっています。

武夫さん、職務代理者に大谷雅彦さんを選任したほか、行政改革の推進についての協議を行いました。
行政改革推進委員会は、次のとおり。
仲元西夫、大谷雅彦、中川晴夫、井上信也、日野富士一、木嶋君子、梶原良子(敬称略)



行革委員会(役場3階大会講堂)

暑中お見舞い申しあげます。

平素は何かと町政推進に御支援を賜り感謝申し上げます。本町を取り巻く行政は、かつてないほどの多難な局面を呈しておりますが、理事者一同住みよい街づくりに邁進する所存です。今後とも格別の御支援御協力を賜りますようお願いいたします。酷暑の御自愛くださいますようお願い申し上げます。

昭和六十年盛夏

町長 阿部 茂久
助役 上田 実
収入役 松本 福雄

海・山

ふるさとの幸をお届けします

ふるさと宅急便「瀬戸の花嫁便」協議会発足

去る七月十九日、農協、漁協、商工会、生活改善グループ等で協議会を発足しました。この事業は、瀬戸町をふるさととされる方及び、この事業に賛同されます方を対象に瀬戸で生産されました農産物や海産物をお届けする事業です。農林水産物の加工は、昔ながらの手作りで製造したものの、果実、水産物は、適期

収穫物を厳選してお届けします。その他手芸品等も予定しています。
今後協議会の当面の課題は宅配品の選択、会員の募集、パンフレットの作成等です。名称は、瀬戸の花嫁の地にちなみ「瀬戸の花嫁便」と名づけました。
瀬戸町をふるさととされるみなさん、瀬戸産品ご愛用のみなさんとの心のふれあいを深め、慈しみの交流ができることを期待しています。

10月1日(火) 国勢調査にご協力を

10月1日、全国一斉に国勢調査が行われます。国勢調査は、大正9年から5年ごとに実施され、今回で14回目となります。調査の結果は、福祉、雇用、住宅、環境整備など、わたしたちの暮らしに密着したさまざまな問題について、国や都道府県、市区町村が行う行政施策の重要な資料として利用されます。9月



空缶の投げ捨てはやめて

みんなでまちをきれいにしましょう。

近年、車社会の発達と清涼飲料水等の自動販売機による販売が増加してまいりました。このため、道路端や農地、小路等に空缶・空瓶の投げ捨てが頻発して農作物栽培、また、観光等に多大な支障を与えています。
また、観光シーズンにはいり、海・山には多くの観光客が訪れ空缶・空瓶の投げ捨てが多くなる時期でもありますが、まちをいつまでもきれいに子孫に継承するため人間一人ひとりが良識ある行動をとってほしいものです。



むかし、商家などの奉公人は、敷入といって、お盆の七月十六日に暇をもらって、里帰りしたものです。いまのサラリーマンは、年次有給休暇があつて、いつでも休みがとれるわけですが、それでも、帰省と言うと、月曜のお盆の八月に集中します。
これは、故郷に帰って祖先を祭るためでもあります。
が、やはりこの時に帰ると、親戚や旧友に会えるからでもあります。
ある調査によると、全社一斉夏季休暇を行っている企業のうち、半分近くが、八月のお盆の時期に実施しているようです。
最近では都市生活者が増加し、故郷を持たない、都市二世や三世が多くなりましたが、それでも、国内旅行のほほ四分の一が「家事・帰省」のためとなっています。ちなみに平均宿泊数は約一・五泊(昭和六十年版観光白書)。

帰省



しかし、最近の傾向として、帰省しても実家の近くにある温泉などに泊まる人が増えているようです。
主な理由は、実家に帰っても家を洋風化し個室式に建て直してしまい、各人が部屋を持っていくので泊まりにくい。
ところが、兄弟が動いてくれるので迷惑をかけるという悪いところがあります。
と、ころで、毎年八月一日から一週間は、「観光道徳の高揚と観光資源の保護週間(観光週間)」です。観光地的美しさを守るために、ゴミや空き缶の投げ捨てなどは絶対にやめたいものです。

こちら保健婦です

— 老人精神衛生相談の御案内 —

- 最近、ほけてきたのでは?と心配なさっている家族の方
 - ほけ老人をかかえて1人で思い悩んでおられる方に
- 保健所では、そんな方を対象に相談を行っております。尚、連絡先は役場町民課保健環境係まで。在宅での巡回相談(精神科医師)も行っております。



〔老人ほけのはじまりとは〕

- 物忘れが多くなる。
 - いつとはなく出歩いてしまう。
 - わけのわからぬことをいう。
- 重症になると幻覚や妄想などもみられるようになります。

〔老人ほけの原因〕



いろいろありますが、次のようなことが複雑にからみあってでてくるといわれます。

- 病気では ●脳卒中(脳出血、脳梗塞)
●頭部打撲など
- 環境では ●生活環境の急変
●引っ越し・転居
●期待はずれ
●長い間他人に依存するなど
- 性格では ●がんと ●無関心
●交際下手 ●無趣味など



〔老人のほけを防ぐためには〕

第1に病気を予防し、早期に治療することです。



脳卒中や動脈硬化の原因となる高血圧、糖尿病などの慢性病を予防し、早期発見、早期療することです。

第2に住みやすい社会環境をつくるのが大切です。

おとしよりはいままでも社会に貢献し、家庭を維持してきた人ですから、老いたからといって、又、「ほけ」たからといって病院や施設まかせにして良いということではありません。家族みんなで助け合いながら共に暮らすということが必要です。

第3に実りある人生を過ごすことを心がけることです。

だれもが自分の老後の生活を楽しく過ごしたいと願っています。そのためにも日常生活を上手に使うことを心がけたいものです。つまり、たっぷりある時間を有効に活用することです。その一つとして、体操とか、散歩・山歩き、ゲートボールなど、うっすらと汗がにじむ程度のスポーツを楽しむことや趣味を持つこと。老人クラブなどに積極的に参加し豊かな人間関係を保ち、生きがいのある生活を過ごすことです。



佐田岬半島の移り変わり

(資料提供 新田好氏)

佐田岬半島の移り変わりを四十年近くにわたって、写真におさめたカメラマン・新田好氏が当時を語る。

私が、佐田岬半島の写真を撮るようになってからもう四十年近くになる。理由は、別段これといったことはない。とにかく、あけすけで、のんびりして、陽気で明るく、人情深いこの土地の人々に魅せられたのかもしれない。

岬でもよく好んで写したのには、串、正野の海と川之浜、大久の牛飼う浜の暮しだった。かつては、川之浜の砂浜で三、四百頭の牛が放牧されている姿は、壮観でいまでも思い出す。

「先生、また来なはったかや、大阪へ働きに行っちゃる父やんと娘に送ってやるけん写真撮っちゃんなははいや」

「よっしゃ、ええ顔しないよ。あ、もつと笑って…」とシャッターを切る。

六人の子供たちの大世帯、五人と娘は阪神方面へ出稼ぎ。

かつては、牛の飼育、芋の耕作、主婦は一家の大黒柱となっていた。朝早くから晩まで働いた。この地方の人々は、働くために生まれて来たように働く。

昭和五十年に出版した写真集に残した文章を思い出す。

● 岬の女は、よく働く。どんな苦しい生活でも黙って耐えて働く。この女性の人々が岬をささえてきた。

● 岬の子供たちのことを悪鬼といい、仔牛のことをお宝きんと呼んだ。決してわが子が可愛くないというものではない。みんなが牛を大切にしていた。

● 岬半島の生活も、国道一九七号線の整備によって大きく変貌してきてきた。農家の暮らしも豊かになってきた。

● それと同時に、一番大切なものが忘れかけようとしている。



1957年 川之浜



1957年 川之浜



1952年 大久



1967年 川之浜

